

3. 所得効果と代替効果

価格が下がった時、需要が減るものはあるか？

これが問題だ。

「値段が下がれば売れるのが普通ですよ。もある気はしますね。」

志木映子は頭の中にある経済学の教科書をぱらぱらとめくった。

「あ、これは上級財とか下級財とかの問題ですか？」

「うーん、惜しいというか、全然的外れというか」

「どっちですか？」

「財を分類するという意味ではあってるけど、もっと複雑な問題なんだよね」

「上級財、下級財は単純なんですか？」

「まあ、そうだね。所得が上がった時消費が増えるのが上級財、所得が下がった時消費が減るのが下級財」ということだ。上級財の例は？」

「所得が増えれば買うものということなら、ブランド品とかですかね」

「そうだね。まあ、所得が増えればたいていのものはたくさん買いたくなるから、基本的に上級財の方が多いかもね。下級財の例は、カップ麺かな。」

「え、私、どんなにお金持ちになってもカップ麺は食べますよ」

「やりにくいな。じゃあ、マクドナルドなどのファストフード。」

「え、私、お金持ちになっても庶民の気持ちを忘れませんよ。」

「妄想はいいから、しっかり考えてみたら。高級レストラン通いが増えたら、ファストフード減るでしょ。」

「まあ、ダイエットも大事だから全部増やすことはできないですね。ファストフードは減らすかもしれません。庶民の気持ちも大事だけど。ということはファストフードは下級財ということですね。」

「そうだね。ファストフードが流行るってことは、景気がよくなって所得が減ってるということかもね。」

「ともかく、ここでの問題は上級じゃないんだ。もう少し面倒。」

「価格が下がった時の問題ですね」

「価格が下がるということは実質的な所得が増えるということですよ。」

「それが理解できていれば話は早い。名目の所得が変わらなくても、値段が下がれば買う量を増やすことができるということ。上級財、下級財の議論でわかるように、所得が増えてもその財の購入を増やすかどうかかわからないけど。」

「値段が下がる、ということは2つの側面がある。ひとつは、ほかの財との相対価格の問題。無差別曲線が右下がりであることを前提にすれば、価格低下は確実に購入増をもたらす。所得が増えてもその財が増えるかどうかは

わからないけど、相対価格の低下は確実に購入増をもたらすとういことだ。」

「価格が下がった時、需要が減るものがあるか」という問題は、①相対価格の低下②実質初頭の増加の2つに分けて考えればわかる。相対価格の低下の効果で需要が減ることはあり得ない。

「そうですか。無差別曲線が右下がり出ないというむちゃな仮定を置かない限り絶対増えるとういことですね。」

「しかし、所得の増加は、その財の購入を増やす場合もあれば減らす場合もある」

「さっきの、上級財と下級財ですね。所得が増加しても下級財の場合は需要が減るとういことですね」

「そう。だから相対価格の低下で需要が増える分と所得増による需要減の綱引きになって、所得増の影響が大きければ、需要が減少する場合はある、とういことだ。」

「値段が下がっても需要が減るんですね。変な商品ですね」

「ギッフェン財という名前がついている」

「ゲッ変財ですね。」

「ロバートギッフェン（1837-1910）、という経済学者の名前だよ」

【問題】

(1) X財が下級財でありY財が上級財であるとき、X財の価格が上昇すれば、X財に関する代替効果は負であり所得効果は正であるので、X財の需要量は減少する。

(2) X財が下級財でありY財が上級財であるとき、X財の価格が低下すればX財に関する代替効果は正であり所得効果は負であり、X財の需要量は増加する。

(3) X財がギッフェン財でありY財が上級財であるとき、X財の価格が上昇すれば、X財に関する代替効果は正であり所得効果は負であり、X財の需要量は増加する。

(4) X財がギッフェン財でありY財が上級財であるとき、X財の価格が低下すれば、X財に関する代替効果は正であり所得効果は負であり、X財の需要量は減少する。